

保険適用が大きく広がるロボット支援手術

◆12のロボット支援手術が新たに保険適用

2018年1月、新たに12のロボット支援手術（下表）が4月から保険適用されることが決まった。これまでは、既存技術（ロボットを使用しない腹腔鏡下手術）に対する優越性（入院日数の短縮や輸血量の減少など）が臨床試験で示されていた前立腺がんなどに保険適用が限られていた。今回の12ロボット支援手術は、既存技術と同等の有効性が示されており、既存技術と同じ保険点数での保険適用が認められた。日本には300を越す手術支援ロボット「ダビンチ」がすでに導入されており、ロボット支援手術が普及していることや、多くの外科系学会から保険適用を強く要望されたこと、手術支援ロボットに外科医の負担軽減や技術習得の速さなどの利点があることなどが評価された。

表 新たに日本で保険適用が認められた12手術と既存の2手術

保険が適用される手術	保険 収載年	年間ロボット支援 手術数(2015年)	年間総手術数 (2015年)
縦隔(胸腺、甲状腺など)がん、縦隔良性腫瘍、肺がん、 食道がん、心臓弁形成、胃切除、胃全摘、胃噴門側切除、 直腸がん、膀胱がん、子宮がん、子宮全摘	2018	<1,000 ^(注)	約29万
前立腺がん	2012	1万2,404	2万1,676
腎臓がん	2016	<500 ^(注)	1万3,306

(注)日本ロボット外科学会の統計、消化器(腎臓を含む)544件、婦人科170件、胸部外科110件からの推定

(中央社会保険医療協議会、日本ロボット外科学会HP、病院情報局統計他を参考にARC作成)

◆ロボット支援手術がスタンダードな手術法に、求められるコスト削減

現在、日本で使用されている手術支援ロボットは米国インテュイティブサージカルの「ダビンチ」だけである。前立腺がんの手術ではすでに半数以上利用されている。「ダビンチ」本体や消耗部材、メンテナンスなどで約200億円（2016年）の売上があり、今回の保険適用の拡大により10倍以上に増加する可能性がある。一方で、「ダビンチ」は1台約1億円の高額なロボットであり、その消耗部材やメンテナンス費用も高額であるため、国民医療費を増加させる可能性が高い。米国では「ダビンチ」よりコストの安い手術支援ロボットが承認されている。日本でも安価な手術支援ロボットの登場が望まれる。

【毛利光伸】